

別添3-2 調査研究報告書 (要旨)

飼鳥雑誌にみる大正・昭和初期の外国原産鳥類の飼養と籠抜—外来種定着リスク回避のための適正飼養に向けて

Aviculture and Bird Imports in Taisho and Early Showa Periods as Seen in Japanese Aviary Magazines:
Towards Proper Aviculture Practices for Risk Avoidance of Invasive Species Establishment

東京都市大学大学院環境情報学研究科 西田澄子

東京都市大学環境学部環境創生学科 北村 亘

Sumiko Nishida (Tokyo City University, Graduate School)

Wataru Kitamura (Tokyo City University, Faculty of Environment)

キーワード： 飼鳥、外来種、雑誌、昭和

keywords: Cage bird, invasive species, magazines, Showa

1. はじめに

1.1 飼鳥と外来種

愛玩のための鳥の飼育は、古来より世界のさまざまな地域で行われてきた^{1)~3)}。日本でも昔から鳥を飼養して愛でる風習があり^{3)~5)}、江戸時代には、庶民の間でも食用等の実用ではない愛玩目的の鳥の飼育がさかに行われていた⁶⁾。明治以降にはいわゆる洋鳥とよばれる外国原産の飼鳥が多く輸入・国内繁殖されるようになり一般家庭でも手の届く愛玩動物となっていった^{3),4)}。一方、外国原産の愛玩動物の野外への逸出は、自然の生態系に影響を及ぼす可能性のある外来種の移入の原因の一つにもなっている^{7),8)}。

外来鳥類の中には、ワカケホンセイインコ、ガビチョウ、ハッカチョウ、ソウシチョウなど、愛玩用に飼育されている飼鳥の籠抜（飼育個体の非意図的な野外への逸出）や野外への投棄に由来すると考えられている種類がある^{9)~11)}。飼鳥由来と考えられる外来鳥類の野外での初見は、昭和期（1920~1980年代）に多く報告されていることから¹¹⁾、この年代

に外来鳥類の定着の原因となるできごとが起こった可能性が考えられた。

1.2 大正・昭和初期の飼鳥雑誌

外来鳥類定着の原因の解明のためには当時の愛玩用の飼鳥の飼育実態を知ることが重要であるが、当時飼鳥を飼育していた人々および飼鳥ビジネスに関わっていた人々の高齢化・死去により、聞き取り調査等が年々難しくなっているのが現状である。そこで、聞き取りに代わる方法として、当時の飼鳥飼育の実態が記録された文献資料の調査を行った。文献資料としては主に飼鳥に関する雑誌（以下、「飼鳥雑誌」とする）を対象とした。現在では、ソーシャルネットワークサービス（SNS）の利用等のインターネットを通じた情報収集が人々の間で広まり雑誌の機能的代替物となりつつあり¹²⁾、雑誌の刊行数は減り続けている¹³⁾。しかし、大正後期・昭和初期は、雑誌が情報伝達手段として重要な機能を担っており¹⁴⁾、そして、飼鳥雑誌も、鳥の飼養に

関する知識・話題を得たり交換したりするための重要な情報源として広く活用されていたと推測された。

2. 方法

2.1 過去に出版された飼鳥雑誌の調査

飼鳥雑誌等の限られた読者層の雑誌は公共図書館等で長期に渡り保管されることが少ない。そのため、まず飼鳥雑誌を所蔵している施設を調べ、可能な限り飼鳥雑誌を閲覧して出版に関する情報を調査した。

2.2 大正・昭和初期における外国原産鳥類の飼養

1922年(大正11年)に創刊された「趣味の飼鳥」(飼鳥趣味社)について、登場する飼鳥の名称と出現する頻度の変化を、各号の記事に登場する飼鳥名を数えることにより調べた。1つの記事に同じ飼鳥名が複数回出てきた場合には1回と数えた。日本で飼養されていた外国原産鳥類の種類把握が目的であるため、日本に輸入されたことのない外国の鳥類の記事についてはカウントせず、日本の在来種については種としてカウントしたのち飼鳥の種類としてはすべて「和鳥」として扱った。鳥の種類は目までの分類を行ったが、スズメ目については多くの科に分かれていることから科のレベルで分類した。さらに、記事に頻繁に出現した種類について、年ごとの出現数の変化を調べた。

2.4 導入圧に関係するできごと

飼鳥雑誌の記事から、外国原産鳥類の野外への導入圧をもたらす出来事を抽出した。抽出した出来事は、非意図的な飼鳥の籠拔、狩猟鳥を含む意図的な放鳥、および、外国原産鳥類の逸出に関する社会情勢のカテゴリーに分類した。

3. 結果と考察

3.1 大正・昭和初期の飼鳥雑誌

大正・昭和期には、少なくとも45種類以上の飼鳥雑誌が発行されていた。1921年(大正10年)に創刊した「かひどり」が最も古い飼鳥雑誌と思われる。

1927年は、最も多くの飼鳥雑誌が刊行され、少なくとも17種類の飼鳥雑誌が存在していた年であった。しかし、同年は、銀行の取付け騒ぎ、最大手総合商社の経営破綻等などが次々発生した、いわゆる昭和金融恐慌が始まった年でもあった。さらに不安定な日本経済が続く中、4年後の1931年には、飼鳥雑誌はわずか7誌にまで減少している。一方で、この時期には飼鳥雑誌の創刊も相次いだ。特に1927～1930年(昭和2～5年)は、飼鳥雑誌の出版ブームとも言えるほど次々に飼鳥雑誌が刊行された。しかし、その多くは続かず1～3年の間に刊行が確認できなくなっている。

太平洋戦争直前期の1930年代後期になると、飼鳥雑誌はわずか3誌のみになった。さらに太平洋戦争後半になるとこの3誌も発行されなくなり、太平洋戦争後期には飼鳥雑誌の発行が確認できなくなった。

太平洋戦争終戦2年後の1947年、「鳥獣時事新聞」が創刊された。その後、1950年代後半から1960年代前半にかけて、再び複数の飼鳥雑誌が創刊されるようになり、1960年には飼鳥雑誌は5誌となったが、1965年にはこのうちの4誌が消え「鳥獣時事新聞」1誌が残るだけとなった。

3.2 大正・昭和期の日本の飼鳥

外国原産の鳥類の飼養は241種類、日本の在来種と考えられる鳥類の飼養は140種が確認された。特に、オウム目と、スズメ目のカエデチョウ科とハタオリドリ科、キジ目およびハト目の種類が多かった。最も多かったのはオウム目(インコ科とオウム科を含んでいる)で、当時さまざまな種類のインコ・オウムが輸入され、また人気も高かったことがわかる。スズメ目のカエデチョウ科とハタオリドリ科は、鮮やかな色や飾羽などが美しい種類が多くまた小型であるために、観賞用として人気があった。キジ目もキンケイ、ギンケイ、ハッカシなどをはじめとしてさまざまな種類が記事に登場した。

3.3 導入圧に関係するできごと

飼鳥雑誌が扱う記事は、飼鳥の飼育や繁殖に関する技術的な情報や飼鳥の値段の動向を載せていることが多く、籠技に関する情報は、本編ではなく雑談的なコラムやこぼれ話的な記事に登場することが殆どであった。

しかし、1928年に飼鳥の国内での生産が過剰となると、飼鳥を野外に多数放しているという本格的な記事が登場しはじめた。そして同年と翌年の「鳥獣報告集」¹⁵⁾には野外での飼鳥の目撃情報も寄せられている。また、太平洋戦争後、日本経済が回復し再び複数の飼鳥雑誌が刊行されるようになり飼鳥を飼うことが再び一般的になってきた1952年の「鳥獣時事新聞」では、当時の輸出向けカナリア飼育ブームによるカナリアの生産過剰を憂う記事として、大正・昭和初期の飼鳥ブームの時に多くの飼鳥が野外に放されたことについて触れている。

1954年と1955年には、商業施設に飼鳥を放して来場者に生け捕りにさせるというイベントの記事の掲載があった。来場者によって捕獲されなかった残りの鳥が回収されたかどうかはさだかではないが、当時はまだ外国原産の鳥類が野外へ逸出することに対する警戒感はあまりなかったようである。さらに、このような飼鳥の生け捕りイベントや、1957年の飼鳥の生体を菓子の景品にしていたことが分かる記事からは、当時の飼鳥の適正飼育に関する知識が未発達であったことが窺われる。

4. おわりに

1927年の昭和金融恐慌の直前には、投機的な飼鳥の大ブームがあったことが確認された。そして、飼鳥の値段が暴落した時、多くの飼鳥が野外へと放された。ベニスズメ、ブンチョウ、ギンパラ、ヘキチョウなどは、大量に野外放鳥されていた時は、野外で群れになって暮らしているという多くの目撃情報があった。しかし、現在ではこれらの鳥は野外での繁殖が確認されなくなっている¹⁶⁾。今回の調査で抽出できた野外での目撃情報は、品種改良を重ねたセ

キセイインコ、カナリア、ジュウシマツという飼育下で品種改良を重ねた飼鳥であるため野外での生存は難しく、移出個体が一時的に目撃されても完全に定着することは難しかったのではないかと考えられる¹⁷⁾。しかし、外来種の定着には導入量の多さと頻度が非常に重要であるため^{8),18)}、飼鳥の野外投棄は外来種移入防止の観点からも非常に警戒すべきである。

1928年に飼鳥の野外への大規模な逸出が生じた背景には、飼鳥の飼育という行為が愛玩動物を愛でるという行為から逸脱して投機の対象となっていたという背景があった。大正・昭和初期の飼鳥の大ブーム時には、飼育技術に関する当時の最新の情報を仕入れながら愛情を持って飼鳥の適正飼育の模索を続ける人々がいる一方で、少しの投資で確実に儲けられると聞いて投機心から青いセキセイインコや梵天（頭部の羽毛が巻毛になった品種）のジュウシマツに夢中になった人々もいたのである。太平洋戦争後の1950年代頃からのカナリア輸出をはじめとする輸出向け飼鳥繁殖への期待も、結局は似たような構図となっていった。外貨を獲得するための飼鳥輸出に向けてカナリア繁殖が奨励されたが、結局は思うような買値を提示されず財を失う者もおり¹⁹⁾ 値のつかないカナリアや雌のカナリアの行先にも問題が生じていた。

このように、人々の投機心と飼鳥の飼育が結びつくことは、動物の福祉を大きく損ない、大量の飼鳥の野外への逸出を引き起こす可能性がある。これは飼鳥のみならず他の愛玩用に飼育される生物についても同じことが言える。飼育動物の終生飼育の観点と外来種移入防止の観点からも、投機目的の飼育・繁殖は絶対に避けなければならない。

引用文献

- 1) Bechstein, J.M. (1812) *The Natural History of Cage Birds: Their Management, Habits, Food, Diseases, Treatment, Breeding and the Methods of Catching Them*. Groombridge & Sons.

- 2) Carrete, M.; Tella, J.L. (2008) Wild-bird trade and exotic invasions: A new link of conservation concern? *Front Ecol Environ* 6.
- 3) 鷹司信輔 (1917) 飼ひ鳥 裳華房. 東京.
- 4) 岡田利兵衛・鷹司信輔・高野鷹蔵 (1952) 小鳥. 朝倉書店.
- 5) 細川博昭 (2019) 鳥と人、交わりの文化誌. 春秋社.
- 6) 細川博昭 (2006) 大江戸飼ひ鳥草紙－江戸のペットブーム. 吉川弘文館.
- 7) Duncan R.P., Blackburn T.M. & Sol D. (2003) The Ecology of Bird Introductions. *Annu Rev Ecol Evol Syst* 34:71–98.
- 8) Lockwood J.L., Hoopes M.F. & Marchetti M.P. (2013) *Invasion Ecology*. second edition. Wiley-Blackwell, UK.
- 9) 成末雅恵・小原秀雄 (1982) 東京周辺における飼鳥の二次野生化. 沼田編 湾岸都市の総合的生態学的研究 IV. 文部省 p.62-65.
- 10) 川上和人・叶内拓哉 (2012) 外来鳥ハンドブック. 文一総合出版.
- 11) 国立環境研究所 侵入生物データベース <https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/index.html> (最終閲覧日 2024 年 3 月 23 日)
- 12) 佐藤卓己編 (2015) 青年と雑誌の黄金時代－若者はなぜそれを読んでいたのか. 岩波書店.
- 13) 総務省統計局 (2023) 日本の統計. <https://www.stat.go.jp/data/nihon/index1.html> (最終閲覧日 2024 年 3 月 23 日) .
- 14) 永島寛一 (1967) 雑誌論入門. 吾妻書房.
- 15) 農林省畜産局編 (1925-1938) 鳥獣報告集. 農林省.
- 16) 植田睦之・植村慎吾 (2021) 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016 年–2021 年. 鳥類繁殖分布調査会.
- 17) Nishida, S. & Kitamura W. (2024) An Influx of Non-Native Bird Species into the Natural Environment Owing to the Accidental Release of Pet Birds in Japan. *Animals* 2024, Volume 14 (2) 221.
- 18) Jeschke J.M. & Starzer J. (2018) Propagule Pressure Hypothesis. In: Jeschke J.M. & Heger T. Eds. *Invasion Biology – Hypotheses and evidence*. CABI.
- 19) 全日本カナリヤ輸出促進協議会 (1952) 輸出カナリヤ座談会速記録. 全日本カナリヤ輸出促進協議会.